

書評

地域医療と暮らしのゆくえ

超高齢社会をともに生きる

地域医療と暮らしのゆくえ
超高齢社会をともに生きる

高山義浩

多死時代のプライマリ・ヘルスケア
その答えは暮らしのなかに

世界の真実・紛争をテーマにさすった著者が、医師となって、
産科・小児科で若手医師の職に就いた。
沖縄・佐賀でも地域医療の発展にあり、時に職が関のミッションを帯びて奔走し、
どの現場でも汗をかき続けるその目的、
「地域包括ケアシステム」の実像はどうか。
この国の未来をどう模索しているのか……。日々の診療の傍ら、月刊『病院』、
朝日新聞医療サイト「アピタル」など多方面に発信する著者による、
現代に若い病むひとを支えたいすべての医療者に捧げる提言の書。

医学書院

- 著 高山義浩
- 定価 本体 1800 円＋税
- 発行 医学書院

評者

城西大学経営学部マネジメント総合学科 教授

伊関友伸

地域における医療・介護システムを
考察する絶好の書2025 年問題
——社会問題の大変革期

わが国は年齢階層別人口で突出した数を占める第 1 次ベビーブーム世代が、75 歳以上の後期高齢者となる「2025 年問題」に直面している。現在でも、2025 年以降起きるであろうさまざまな社会問題の先駆けとして、医療・介護サービスの提供力の弱い地方や、貧困が拡大している地域などで、医療崩壊や個人・家庭の孤立という問題が現れている。

著者である高山義浩氏は、厚生労働省から二度にわたって招聘を受け勤務した経験を持つ、沖縄県立中部病院に勤務する医師である。医学書院の月刊誌『病院』における連載「地域医療構想と〈くらし〉のゆくえ」や、朝日新聞デジタル「アピタル」での連載記事、SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）などを通じて独自の情報発信をされてきた。

その中でかねてから著者も指摘されているが、これからの社会は激増する後期高齢者にこれまでのような医療や介護サービスを提供できなくなる時代である。しかし、多くの国民が、そのことに気づかずに生活し、自分の老後も今と同様の社会サービスを受けることができると考えているのではないだろうか。

著者の勤務する沖縄県立中部病院は、有名なトップクラスの臨床研修病院であるが、沖縄県の貧困という社会問題に直面する病院でもある。本書においても「社会の矛盾は、弱者を病気にしながら病院に持ち込まれて」といって書かれておられるように、医療現場での現状についての報告がなされている。

医療・介護サービスの提供力が絶対的に不足する時代に、どのように高齢者をケアする体制を確立していくのか。著者

は、国が進める地域包括ケアシステムについて「地域ごとに形成されるべき『高齢者を支えるネットワーク』であって、そのコンテンツは地域にある資源や自主的な取組に依存」すべきと指摘する。私も同じく、全国共通のツールを一律に高齢者に当てはめるのではなく、地域に住む人たちが高齢者の視点に立って、限られた医療・介護資源をうまくやりくりして生活を支えていくことが、結果として効率的なものになると考えている。

医療というシステムによる
介入に求められる節度

著者は医療というシステムによる介入について節度を持って行うことが必要と指摘する。特に高齢者にとって医療は強制力の強いシステムであり、ベッドに縛り付けることで高齢者の従来の生活を根こそぎ奪ったり、医療へ依存した生活を生む危険性を有している。コストの高い医療が必要以上に高齢者を抱え込むことは、医療が使うお金の増大を招くことにもつながる。

本書は、医療が介護だけでなく、福祉、司法、教育など、あらゆる社会制度との連携を深めることの重要性を訴えている。こうした連携体制の構築にあたっては、「解らないこと、答えがないような課題について、答えが得られるまで待つのではなく、それぞれの立場から語り合うことが大切」であることを指摘する。

超少子高齢化という人類の歴史上にもない大変化に対応していくための答えはない。地域の関係者が発生する問題を 1 つひとつ丁寧に解決していく必要がある。本書は、地域における医療・介護のあり方を考えるための絶好の参考書となっている。一読をお薦めしたい。